

みどり通信

第46号
2025年8月1日

2025

8

令和7 葉月



藤袴

葛

女郎花

桔梗
撫子

萩
尾花

秋

「今日は良い天気」

秋野文子

梅雨明け、猛暑のようだ。

3月に骨折した腰椎が痛い。

腰をかばうからアッチもコッチも痛い。

気を紛らわすしかない。

キャロットをやっていた時の夢を思い出した。

相模女子大のオーケストラ部の人、バイオリン、
ビオラ、コントラバスの三重奏をやってくれた。

私たちが聴いた。

アウトリーチで場所を提供すれば、精神科の訪問医療を受けられないだろうか、いろいろ話しはした。

勉強もした。

お茶も飲んだ。

夢、希望に終わらせたくない。

まぶしい太陽を特養の窓から仰ぎ見ながら思う。

7月19日

「家族療法」

秋野文子

社会事業大学、研究科の時、購買部で<家族療法>の月刊誌が山積みになっていた。

家族療法は森田療法を元に浜松医大、石川元教授を中心に学会があり、研究と実践の交流が活発に行われていた。

私は息子が相模原の教育相談室に通っていて、彼にはユングが専門の、私には家族療法専門のカウンセラーがついた。

毎週、1時間のカウンセリングがあった。

私は内容は兎も角、自分の為に1時間、相手をしてくる人がいて、息子も何やら楽しそうな声をする。

ひとまず安心した。

家族療法は家族の力で治療をしていく。

学校に行っていないのを何とか行かせようというわけではない。

家族自体の、ありようを見直していくものだった。

「これから先」

家族療法が流行ったのも、私が関わったのも35年前のことだ。

みどり会は家族会だから家族のことを考えた。

家族は高齢、子どもたちの年齢も変化している。

少なくとも、息子の足を引っ張るようなことのないようにしたい。

「診療室にて」

ふぁ爺

この国の精神医療のお粗末さについては今更
いうまでもない。これの改善になるのを、我々は
上を向いて口を開けてひな鳥が親に向かってピ
ーピー鳴くようにしているしかないのか？

そんなことはない。患者は精神科医療の重要
なポジションにいるではないか。患者がいるの
は医療の最前線で、現場を構成するのは医師と
患者だ。

ところが現状は、そこに人間は二人いない。そ
こでは患者はもう木偶人形になっている。

医療が行われるのは患者の身体に対してだ。
医療は患者の身体にフォーカスする。患者は主
役なのだ。その患者が自分の身体に対して知ら

ん顔している。まったく、「当事者」とは言えない。

感染症だって薬が治すのではない。免疫力が治すのだ。怪我は組織の再生力が治す。精神の場合「跳ね返す力」が心を回復する（レジリアンス）。ところが患者は跳ね返すどころか可塑体（プラスチック）になって凹ませられるままになっている。

精神医療を良くするためには、診療室で患者が主体性を取り戻すことが、千里の道の第一歩だ。



藪甘草

編集後記

高校野球、神奈川の甲子園出場は何処になるのだろうか？

そうこうしている間に、お盆休み、終戦記念日も過ぎて行く。

感染症も消えていない。

兎にも角にも猛暑を乗り切らなくてはならない。

秋野

midori2shin@gmail.com

